

(社) 東洋音楽学会西日本支部 支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第 65 号 (2009年 8 月 10 日)

◆ 定例研究会の記録 ◆

● 第 242 回定例研究会

と き : 2009 年 3 月 21 日 (土) 13 時 ~ 16 時半

と ころ : 国立民族学博物館 2 階 第 6 セミナー室

内 容 : 映像上映と討論・研究発表

映像上映と討論 :

「Bubur Suro Seribu Rasa (千の味の粥)」(Endo Suanda 監督、74 分、2008 年)

エンド・スア ندا、ヨキ・プルワディ

(ヌサンタラ文化メディアティカール財団)

研究発表 : 多田英俊 (京都洛北高等学校)

「『クドキ』における『つ』音—明治・大正期の義太夫節録音から—」

報告

この定例研究会の前半は、日本学術振興会「飛び出す人文・社会科学～津々浦々学びの座～」(人社版サイエンス・カフェ)との共催で開催した。ヌサンタラ文化メディア財団ティカール(以下ティカール)のエンド・スア ندا氏とヨキ・プルワディ氏を招き、彼らが約5年にわたり撮影してきた西ジャワ山岳地方の一地域ランチャカロンにおける儀礼ブル・スロの映像を見ながら、現代インドネシアにおける宗教とくにイスラームと伝統的な儀礼およびそこで演じられる舞踊や音楽の関係について議論を深めた。

エンド・スア ندا氏は、ワシントン大学等で民族音楽学を学んだ、インドネシアの代表的な民族音楽学者の1人である。近年は、彼が関わるもう1つのNPOであるヌサンタラ芸術教育財団において、多文化主義に基づく文化芸術教育のためのマルチメディア教材の作成、およびその教材を使った授業を实践するため、インドネシア各地における教師への指導などに力を入れてきた。その一方で、ティカールにおいては、西ジャワ芸

能の映像記録作成などに取り組んでいる。ヨキ・プルワディ氏は、エンド氏の下、ティカールにおいて映像記録作成に取り組む若手映像作家である。西ジャワの著名な舞踊研究家であるエノッホ・アトマディブラタ氏は彼の祖父である。

当初1本の完成された映像作品を上映し議論を行う予定であったが、残念ながら重要な儀礼が未撮影等の理由で、作品の完成が間に合わなかった。そのため、いくつかのクリップを見ながら、エンド氏が解説をおこなった。映像の題材となったブル・スロは、イスラーム暦第1月10日におこなわれる儀礼である。この日、人々は、穀物、野菜、果物など、あらゆる種類の食べ物を持ち寄り、たくさん並んだ大鍋でそれらを煮込んで粥(ブル)を作る。そして持ち寄ったものと量に応じて、参加者は粥の分配を受ける。一方、室内ではカチャピとよばれるツィターとタラワンサとよばれる弓奏弦楽器の伴奏で踊る。決まった振り付けはなく、参加者それぞれが思い思いのスタイルで踊るうち、やがて祖先の霊が降りてくるという。多くの参加者が、感極まって泣き出し、そうした一種の興奮状態の中で、合わせた両手のあいだに相手の手をはさみこむ伝統的なやり方により、参加者同士が挨拶を繰り返す。エンド氏によれば、この儀礼は人々と祖先との結びつきを確認し、人々のあいだの絆を深める機会にもなっているという。

映像は、この儀礼に参加する人々の表情を捉え、その雰囲気をよく伝えるものだった。ただ私は、インドネシアのテレビにおける伝統芸能に関するドキュメンタリー番組によく見られるような、記録映像としては意味のないスローモーションのクリップの挿入など、違和感を感じる場面もあった。関係者のインタビューについても、ピックアップしたい言葉の部分のみの短いカットがつけられており、発言のコンテキストや言外のニュアンスなど、本来、映像でこそ伝えられるであろう要素が切り落とされているようにも感じた。また、ブル・スロ以外の様々な儀礼や芸能のクリップが説明なしに挿入されており、ランチャカロンの雰囲気を知るには良いが、ブル・スロ儀礼の成り立ちを知りたいと思う者にとっては、若干誤解を招きそうな構成でもあった。ただし、上映されたのは編集途上の限られた部分であったので、完成された作品の中におかれた場合、また違った印象をもたらすかもしれない。いずれにせよ、美しい映像による丹念な記録は、完成された作品への大きな期待を抱かせた。

エンド氏は、当初、エスノグラファーとして、映像により儀礼を記録することを目的として撮影をおこなっていた。しかし、調査撮影を重ねるに従い、インドネシア社会に対して、自らの意見をぶつける手段として、映像作品を編集することを思い立ったという。ブル・スロのような儀礼は、より「純粋な」イスラームを目指す人々からは批判の対象とされている。そうした人々は、宗教的に許されるものと許されざるものを厳密に区別し、正しいものと間違っただけのものに分けていこうとする。しかし、エンド氏は、

それは誰にとっての「正しさ」なのかに疑問を呈する。ランチャカロンの人々にとって、祖先から伝えられたものを守って暮らしていくことは、自らが平和に生きていくために欠かすことのできないことであるという。ブブル・スロは、イスラーム以前の信仰とも融合しながらランチャカロンの人々の生活に不可欠なものとして溶け込んだイスラームを基盤にしている。ランチャカロンに見られる伝統的なあり方も許容するイスラームの確立が、エンド氏が映像作品を通じて訴えたいことの1つなのであろう。

エンド氏は、こうした動きを法や宗教と文化や芸術との対立として捉えようとした。しかし、この二項対立の図式は、私たちが少なからず混乱させた。私には、エンド氏が問題にする対立は、コーランに基づく教義のみにのっとりとするイスラームと、伝統的に実践されてきたイスラームとの対立として捉えるべきものに思えた。ただ、現代のインドネシア社会でおこっていることを背景として考えると、エンド氏の捉え方も理解可能である。たとえば、「純粋な」イスラームを目指す動きに押され、新たに立法されたポルノグラフィ規制法は、場合によっては肩や腕を出す伝統的な舞踊の衣装までも規制の対象としかねないものであり、多くの文化人が反対の声を上げている。イスラームを背景とする「法」によって、文化や芸術を規制しようとする動きに対する反発が、彼の映像作品の背景にはあるのだろう。エンド氏は、自らを社会政治的な運動にかかわる「活動家」としても規定している。個人的な会話の中で、エンド氏は、作品が完成した暁には、まず宗教家を対象として上映するよう準備を進めていると述べていた。彼の映像作品がインドネシアにおいてどのような意味をもちうるのか、今後を見守りたい。

(福岡正太 記)

多田英俊氏のご発表は、明治大正期のクドキの音声表現に用いられる「つ」音の特徴について考察するものである。現代標準語の「つ」音が破擦音[tʃu]とされるのに対して、義太夫節においては、現代も、キツネ詞や岩永左衛門の台詞で、例外的にこれとは異なる「つ」音が認められると指摘する。さらに、この「つ」音が、このような型とは別に、明治大正期にはクドキの中でも個人様式として用いられたと指摘する。また、資料を交えた考察の結果、明治大正期に、現代語とは異なる「つ」音は非文楽系の太夫が多く用い、現代語と同じ「つ」([tʃu])音は文楽系の太夫が多く用いるという、個人様式よりも広い芸系の傾向が指摘された。

発表者は、義太夫節の伝書にある音声表の解釈で、国語学の音韻論を引用されたが、発表後のフロアからは、個人様式や演出様式をたどるはずが、時代様式と混在しているのでは、との指摘がなされた。この指摘通り、伝書の発音規範は、国語学によって一般化された時代的観点にとらわれることなく、個々に音声学的観点で捉える方が望ましい

ように思われる。

本発表は、「どの分野で、いつから、誰をきっかけに、どのような様式が生まれたのか」を判断するために、微細な音色を奏でる演出様式である発音技法についての考察を試みた点が評価される。確かに、発表者のとりあげた種々の「つ」の音を音声学的な観点から分類してみると、破擦音とは異なる、閉鎖音[tu]と反り舌音の[tʰ]が用いられていることがわかる。たとえば、発表者が提示した例外的な型であるキツネ詞の発音は、評者の知覚では、現代語よりも舌の位置が後方へさがる、反り舌音[tʰ]に極めて近い発音と認識される。さらに、これは、浄瑠璃では「呑むカナ」として、母音の消失が確立していることから[t]のみで発音、即ち、実際の音声としては[tʰ]に聞こえ、クドキで用いられる反り舌音[tʰ]や、閉鎖音[tu]とは、古くからその音声が異なって分類されてきたのではないかとも考えられる。

本発表の主旨は表現様式の変化をたどろうとするものである。そのためにはまず、邦楽の各ジャンルに具現する「つ」の異音という観点から、義太夫節特有の音声表現の本質を分析する必要があるだろう。これにより、いつから、或いは、なぜ太夫がその発音を選ぶのかを解明しようとする、発表者の意図が明確にされるのではなかろうか。今後は、発音技法について、音声学的観点からの研究も深められることを期待したい。

[tu] [t] の反り舌音の発音記号

[tʰ] [t] の反り舌音+声門閉鎖音の発音記号

(龍城千与枝 記)

### ●第 243 回定例研究会

と き：2009年 5月 30日 (土) 14:00-17:00

ところ：大阪市立大学文化交流センター (大阪駅前第 2ビル 6F)

内 容：小泉文夫賞記念講演・研究発表

小泉文夫賞記念講演：

シムハ・アロム (フランス国立科学研究センター名誉研究部長)

「予期せぬ類縁性：西洋中世のポリフォニーとアフリカのポリフォニー」

通訳：徳丸吉彦 (聖徳大学教授・放送大学客員教授)

研究発表： 1. 修士論文発表：岡戸香里 (大阪市立大学大学院)

「ラングンドゥリヤンの表現—

ジャワ伝統舞踊劇におけるクロス・ジェンダード・パフォーマンスの一側面」

## 2.博士論文発表：大久保真利子（大阪芸術大学大学院）

「芸術文化政策実践としての音楽の記録化—近代日本の長唄を中心に」

例会担当：山本宏子（岡山大学）

### 報告

シムハ・アロム氏は、「長年のアフリカ音楽の研究、とりわけアフリカのポリフォニーとポリリズムに関する独創的な研究、そして民族音楽学に厳密な方法論を提示した功績」により、第20回小泉文夫賞を受賞した。本講演は、その受賞を記念して行われた。アロム氏は、アメリカを中心とする、文化の中の、あるいは文化としての音楽の研究を目指す民族音楽学の動向とは一線を画し、音楽分析に重きを置いた研究を進めてきた。その成果は、代表的著作 *African Polyphony and Polyrhythm: Musical Structure and Methodology* (仏語版は1985年刊、英訳は1991年刊) に見ることができる。

アンドレ・シェフネルが述べたように、ヨーロッパのように書記性をもつ音楽の特性は、口頭で伝承されてきた音楽には認められないと考えられてきた。しかし、アロム氏は、しばしば西洋中世の音楽に固有の特徴と考えられていた要素が、中央アフリカの音楽にも見られるとする。この講演では、中央アフリカの音楽にみられる時間の組織化とポリフォニーを生み出す技法を検討し、それらが西洋中世音楽でも用いられていたものと共通することが論じられた。アロム氏によれば、アフリカのポリフォニーの技法としては、平行進行、ホケット、対位法が考えられる。ヘテロフォニー、および、応唱レスポンソリウムにおける交代する声部のオーバーラッピングの結果生み出されるポリフォニーは、偶発的なものであるとされ、ここでの検討からははずされた。

最初に、アフリカ音楽の基本的特性として、時間の組織化の特徴が論じられた。それは、(1) 周期的な枠組みと (2) その枠組の中にどのようにリズムパターンを配置するか の2つの点からみることができる。周期性は、長さが等しいパルスが一定の数集まって形成される。パルスは、さらに2つあるいは3つに分割されるが、それをアロム氏は「操作的な最小単位」と呼んだ。これは「density referent」などとも呼ばれるもので、アフリカのリズムをとらえる際の基本的な指標となるものである。アフリカ音楽においては、一定のパルスの繰り返しすなわち拍子が生み出す対称性に対して、そこに異なる分節のリズムが配置されることで対立が起こり、聴き手に不確実さあるいはあいまいさを感じさせる。その1例がヘミオラのリズムである。1周期をなすパルスの数とそこに配置されるリズムパターン（一定数の「操作的な最小単位」から成る）が2対3の比をなし、反復されるリズムパターンはパルスとのずれを生じる。こうした手法がアフリカのポリリズムの基礎となり、クロスリズムを生じる。

---

強拍を欠いた等時的なパルスの連続は、14・15世紀の西洋の理論家がタクトゥスとよんだものに共通する。さらにテンプス（タクトゥスをどのように分割するか）、およびプロラツィオ（テンプスをさらにどのように分割するか）の分割も、アフリカの音楽に同じ現象をみることができる。プララツィオは、「操作的な最小単位」と同じ役割を果たしている。その結果、アフリカのポリリズムは、数学的な計算により把握することができるのである。

続いて、中央アフリカの音楽における、ポリフォニーを生み出す技法が論じられた。最初に平行進行の例が取り上げられた。2つの声部が、同じリズムで平行に動く例である。これは、西洋のコンドクトゥスに同様の例をみることができる。2つ目の例は、ホケットだった。これは1つの旋律線を形成するそれぞれの音を、複数の声部が交替で発する方法である。アフリカのホケットの特徴は、1曲の最初から最後までホケットだけで演奏されること、そして声部の多さである。これは、1つか2つの音しか出さない楽器を使用することに由来する。3つ目の例は、対位法である。サハラ以南では、「ピグミー」など限られた人々だけが、対位法を用いた歌を歌う。主声部は、よく知られた比較的単純な旋律を歌う。これはカントゥス・フィルムスに比すことができる。声調に依存する言葉の意味を乱さないため、他の声部は意味のないシラブルで歌う。それぞれのメンバーは、歌のどの場所で、どのようなパターンを歌うことができるかを知っている。彼らは小さい頃からの訓練で、そうしたパターンを蓄積していき、即興的に様々なパターンを歌うことができるようになっていくのである。ヨーロッパでは、書記性に頼りながらより複雑なポリフォニーを発展させたが、アフリカでは、明示的な理論や書記性に頼ることなく、音楽家の心の中に形成された「モデル」に基づきポリフォニーを生み出した。しかし、アロム氏によれば、そこに見られる原則はよく似ており、人間の能力が普遍的であることを示している。

講演の中では、豊富な音の例も示された。アロム氏は、長年にわたり貴重な録音を世に発表してきた。より厳密にポリフォニーの各声部をとらえ、採譜する手法として、複数の録音機を使い、他の声部をプレイバックしながら別の声部を録音する「プレイバック」技法も開発した。当日の質問にも出たが、彼によるピグミーのホケットの録音は、ハービー・ハンコックのアルバム『ヘッド・ハンターズ』に収録されたウォーターメロンマンに（無断で）流用されている。そのほか、多くのジャズ・ミュージシャンや現代音楽の作曲家に多大な影響を与えてきた。

当日の講演には、彼の長年の研究の成果が詰め込まれており、1度聞いただけで全てを十分に理解するのは難しかった。しかし、リズムやポリフォニーの研究を進める上で、アロム氏の研究を避けて通ることはできない。ナティエは、彼の研究を「民族音楽学へ

の分析の復帰」と表したが、世界の多様なリズムやポリフォニーをとらえ、また民族音楽学における音楽分析の位置づけを考える上で、アロム氏の研究を読み込む必要を改めて感じた。

(福岡正太 記)

### 報告 (岡戸香里氏の発表)

岡戸氏による発表は、ラングンドゥリヤンに見られるクロス・ジェンダード・パフォーマンスに焦点を定め、考察したものである。ラングンドゥリヤンとは、19世紀後半に、中部ジャワにおいて発展した舞踊劇で、「心の慰め、喜び」を意味する。この舞踊劇に特徴的なのは、男性役も含めたすべての役柄を女性が演じるということである。

古来より伝わるジャワ舞踊には、それぞれの役柄に対し、特徴的な体型あるいは気性——たとえば悪役は「大きく」て「粗野」である一方で、ヒーローは「小さく」て、「洗練されている」など——や、特徴的な振り付け、衣装や化粧の「型」があり、観客はその「型」から役柄を理解することができる。

しかし、岡戸氏によれば、ラングンドゥリヤンにおいて、女性が演じる男性役の振り付けには、男性が持つ力強さのようなものが見られず、むしろ女性らしさが残る舞踊表現であるとされる。また化粧の点でも、古来より伝わるジャワ舞踊では、悪役は顔を赤く塗り、荒々しさを表現するのに対し、ラングンドゥリヤンでは、荒々しい男性役を演じる女性であってもそのような化粧はなされない。つまりラングンドゥリヤンでは男性役の設定が徹底されていないのである。

ラングンドゥリヤンにおけるそうした曖昧さは、従来は批判的とされることが多かった。しかし岡戸氏は、こうした曖昧さをむしろポジティブに解釈する。岡戸氏は、ラングンドゥリヤンの男性役の設定に見られる曖昧さを、制約の解放、常態の創造的な「否定」と捉える。曖昧な男性役に対し、男性らしさを能動的に補完しようとすることによって、観客は固定された社会通念、つまり従来の男性像を再考する。そこにラングンドゥリヤンの面白さがある、と岡戸氏は考えるのである。

質疑応答では、その曖昧さの中で、女性による演じ分けがどのようにして可能になるのかが議論の中心となった。もう少し時間があれば、発展的な議論も期待できたと思うのだが、基本的な事項の確認に終始してしまった感があった。しかし、短い時間の中で、ポイントを絞った発表であった。

ラングンドゥリヤンのクロス・ジェンダード・パフォーマンスの持つ曖昧さに対し、一種の作品の「開かれ」を見出そうとする岡戸氏の視点自体は興味深い。がしかし、そうしたポストモダン的な解釈は、実際のところ、ラングンドゥリヤンを取り巻くコンテクストの中でどのように受け止められるのだろうか。また、その曖昧さから導き出され

る男性像には、たとえばどのようなものが考えられるのだろうか。これらの問題について論じることができれば、岡戸氏のラングンドゥリヤン解釈の説得力もさらに増すのではないだろうか。岡戸氏の今後のさらなる研究の発展に期待したい。

(山本耕平 記)

### 報告 (大久保真利子氏の発表)

本発表は、楽譜と録音 (特に SP レコード) に着目し、近代日本における長唄の記録活動について検証したものである。発表者は近代日本の長唄の記録化の実態をできるだけ詳細に把握するとともに、そこに「芸術文化政策」という社会的視点を取り入れ、音楽の記録活動がどのような社会的要請をうけて実践、維持されてきたかを明らかにしている。

楽譜では、現在用いられる長唄の楽譜が近代期に考案されたものであることを述べ、同じ近代に行われた長唄の五線譜採譜の知識と経験とが長唄譜考案に大きく影響していることを指摘した。発表では、未だ明らかにされていない邦楽調査掛での長唄の採譜活動を中心に取り上げた。調査においては、現存する長唄五線譜のほか、採譜調査について記した「日誌」などの一次資料を用いることにより、長唄における採譜調査の全貌把握を可能とした。

録音では、近代期に発売された長唄の SP レコードのデータ 1139 例を収集し、その発売記録から長唄レコードの動向を検証している。発表では主に、当時の文部省がおこなった、レコードの推薦、認定、紹介事業に関する事柄が述べられた。ここでは、それまで民間主導であったレコード記録に対して、文部省がおこなった思想の善導の様子が明らかにされた。

以上の事例研究から、長唄の場合、記録するということは社会的要請の有無に関わらず意味のあることであり、その記録が社会的に維持されようとするとき、最も大きな役割を担ったのは「伝承」という側面であるとした。つまり、長唄という種目は音楽の記録化を積極的に推進し、その記録を長唄の社会的維持に活かしたと結論づけた。

発表の内容からは、膨大な資料を詳細かつ丁寧に調査する発表者の姿勢が窺えた。また、楽譜と録音の両者を同等に扱い、長唄を事例として「記録活動」の全容を明らかにしたことは、今後他の種目や他の研究分野においても活用できる有意義な研究といえる。質疑応答では、記録と芸術文化政策との関連性や、楽譜に記録することの意味やその詳細度に関する質問のほか、レコード・データベースのもととなった資料の内訳などについて活発におこなわれた。

(出口実紀 記)

---



●第 244 回 定例研究会

とき：2009年6月20日(土)14時～17時

ところ：京都市立芸術大学 L2 教室

内容：「修士論文・博士論文発表」

1) 田村菜々子(修論・京都市立芸術大学)

「現代仏教信仰におけるご詠歌の諸相－壬生地蔵講を中心として－」

2) 金銀周(キム・ウンジュ)(博論・大阪大学)

「クムスヒョンと『月刊音楽』」

3) 滝(寺田)奈々子(博論・京都市立芸術大学)

「ケクチ・マヤ(グアテマラ高地)の祭礼音楽に関する民族誌的研究  
－音と身体のコスモロジー－」

4) 嶋尾かの子(博論・大阪芸術大学)

「口頭伝承社会・チャンパサクにおける古典音楽の構造」

報告 1 (田村菜々子氏の発表)

従来ご詠歌の研究は、教団による伝承のご詠歌に集中し、民間伝承のご詠歌はほとんど省みられることが無かった。本研究は前者の一例として浄土宗吉水流のご詠歌を取り上げ、後者の一例として壬生地蔵講のご詠歌に着目し、1. フィールドワークによって両者の実践を明らかにし、2. 両者を比較・検討することによってそれぞれの特徴を明らかにして、現代仏教信仰におけるご詠歌のあり方を考察する試みである。

まず、丹念なフィールドワークによって消えつつある壬生地蔵講のご詠歌を記録したことが評価できるだろう。また、民間伝承のご詠歌を教団による伝承のご詠歌と対比させることによって、ご詠歌の現在のあり方を描き出すことにも成功している。特に教団による伝承のご詠歌における評価基準や練習法の検討や、民間のご詠歌の実践に関する音楽的な要素の分析は、両者の性格を際立たせるのに効果的であった。

質疑応答では発表の内容をさらに詳しく問う質問が目立った。例えば、教団のご詠歌の成り立ちについて、あるいは壬生地蔵講における導師の詳細について、さらには同じく壬生地蔵講における外部のご詠歌からの影響などである。興味深く思ったのは、吉水流のご詠歌に作曲という営みが見出されることの指摘である。言葉にふしを付けるという壬生地蔵講のご詠歌と対比させることができる。ただ、いかに壬生地蔵講のご詠歌が伝承に対して柔軟で、脆く崩れやすいものであっても、それがしっかりと書き付けられたテキストに固定されているということについては、留意する必要があるかもしれない。

発表者は壬生地蔵講のご詠歌の特質を『私』のいのりとしての『声』としてのみ存在する」としたが、信仰における声とテキストの関係に関しても研究の余地が残されているように感じた。

全体としてよくまとまった明快な発表であった。今後の研究の展開を期待したい。

## 報告 2 (金銀周氏の発表)

西洋音楽の導入は日本の音楽および音楽文化を一変させた大事件であったが、多くの国においても同様の衝撃を認めることができる。博士論文に基づく本発表は、韓国における西洋音楽の発展に重要な役割を果たした雑誌『月刊音楽』を材料に、20世紀後半の韓国における洋楽受容の実態を解明するものである。韓国における音楽雑誌の出版史が整理された後、『月刊音楽』とその発行人クム・スヒョンが検討され、最後に『月刊音楽』の演奏会記事に基づいて日本人音楽家の韓国公演の状況が紹介される。

近年の日本における洋楽受容への関心の高まりは著しいが、他国の状況を知ることは言葉の問題もあり容易くない。発表は貴重な情報提供の機会となり、活発な質疑応答が行われた。『月刊音楽』と韓国の音楽界についてさらに詳細な知識を求める質問が目立ち、雑誌廃刊後の韓国音楽メディアの状況や、『月刊音楽』の流通状況などが問われた。韓国音楽界の状況が質疑応答で徐々に詳しく紹介されるにつれて、『月刊音楽』の果たした役割の大きさが参加者にも実感されていったように感じた。また、質疑応答から韓国における音楽学の状況も伺うことができた。

『月刊音楽』の演奏会記事から20世紀後半の韓国における西洋音楽の状況を整理したのは重要な業績であり、今後基礎資料として重用されるに違いない。だが、発表における議論の組み立てを振り返ると、メディアとしての『月刊音楽』に議論の重点を置いたほうが、論旨が明快になったのではないだろうか。また、本研究では『月刊音楽』が専ら歴史資料として活用されていたが、この雑誌の編集・発行に主導的な役割を果たしたクム・スヒョンが報道、記録のみならず啓蒙も重視していたことに注目するならば、言説研究を展開する可能性も指摘することができるだろう。博士論文が出版され、日韓の研究者に広くデータが公開・活用されることを期待したい。

(上野正章 記)

## 報告 3 (滝 (寺田) 奈々子氏の発表)

本発表は滝氏のケクチ・マヤ (グアテマラ高地) の祭礼音楽研究の集大成である博士論文の内容を概括したものである。本発表では、ケクチの人々のもつ内戦体験とその記憶に焦点をあて、祭礼や儀礼の音が彼らとどのような関係をもつのかを追及している。

そして、ケクチの人々が音楽することは、彼らが内戦や日常的差別で受けた苦しみの心象を意識的に、また無意識的に乗り越えてゆくことのひとつとなっているとし、それを「音のちから」として提唱している。三つの祭礼や儀礼と聞き取り調査による内戦被害者や寡婦達のことばなどを追い、末尾において「音の存在論」という語を用いて、ケクチの人びとと音のありかたの試論が示される。

質疑応答では、ケクチ・マヤの人々が儀礼で用いているアルパ・アンサンブルが、土着のものではないことについての指摘があった。キリスト教の要素が入ってくる以前には、音というものがどう認識されていたのか、発表中に重要な要素として提示された「大地の神ツルタカ」といったものはキリスト教が入ってくる以前からあったのではないかという点が指摘された。何をもって「ケクチ・マヤの音楽」と捉えることができ、そして論文中で扱われる儀礼における音の意味がどの文化層に由来するものなのかが示されれば、さらに問題が明確になったであろう。

発表者がケクチ・マヤの人々の「感覚」を彼らの語りから描写する中で、彼らの実際の「感覚」と、彼らがインタビューにおいて言葉として表わした「感覚」が同一のものであるのか疑問が残った。大部な博士論文を短い発表時間内で紹介するという制約があったが、発表者が導き出した「感覚」を立証するインタビュー等の資料がインタビュー人数や質問項目と共に示されれば、この研究の意義がより際立ったであろう。

また、感覚人類学、音響身体論など様々な方法論を援用し、さらには哲学的な考察をも行った意欲的な研究であるが、緻密なフィールド調査の結果を既存の方法論に当てはめるのはややもったいないと思われた。質疑応答の中でも、実際のデータと、報告末尾の哲学的な議論がどう結びついているのかの疑問が呈された。

以上、いくつか批判点を述べてはきたが、本研究はこれまでほとんど先行研究がなかったケクチ・マヤの音楽を、フィールドワークに基づいて丹念に綴っただけでなく、ケクチの人々の語りから彼らの「感覚」の描写を試みた優れた研究であることは確かである。今後は、音と身体の関係についての本発表での考察をさらに深め、より発展した研究成果が出てくることを期待したい。

### 報告（嶋尾かの子氏の発表）

本発表は嶋尾氏の長期にわたるフィールド調査をもとにした博士論文の内容を概括したものである。嶋尾氏の博士論文は、口頭伝承社会であるラオス人民民主共和国の最南端に位置するチャンパサック県に伝承される「ラオス古典音楽」と呼ばれるジャンルの音楽が、それを奏でる楽師たちにどのように記憶されるのかを、ラオス古典音楽の旋律構造から解明したものである。

---

本発表で強調されるのは、「曲の記憶」に関係するのは、音楽の構造だけでなく、楽師たちの先代の師匠に対する信仰心や、教授の場において見られる身振りなど、楽師の演奏にまつわる身体的な要素を含んだものである、という点である。チャンパサック郡ピーパート楽団での調査から、伝承されるものは演奏技術だけではなく師匠の霊への信仰などをも含むとし、師霊へのワイと呼ばれる合掌が行われる場面を分析している。ワイによって、曲を忘れることなく演奏することができるなど、曲の記憶強化にワイが関与しているとするいくつかの楽師達の証言が示された。一方で、ワイが曲の記憶強化に実質的にどのように関与しているのかは明確にされなかった。練習によって記憶した曲を忘れないようにするお祈りのようなものであるのか、記憶のプロセスにワイが実質的に関与しているのか疑問に思った。

発表者の力量が強く示されたのは、曲の記憶と曲の旋律構造の関係を明らかにするために、複雑な曲でもシンプルな骨格のようなものが存在しているのではないかと仮定し、実証した点である。さらに、骨格には、記憶を手助けする3つのパターンがあることを明らかにしている。加えて、感覚的要素として、演奏実践の場での身振りも曲の記憶に反映していることを述べている。

質疑応答では、ピーパート楽団への入門式のありかたや師匠が録音したものについてもワイをするのかなどと、口頭伝承における師匠との関係に関心を寄せる質問がなされた。また、嶋尾氏が「骨格」とする旋律が、複数の曲の間で共有されるのかどうか質問された。今回はサンプル数が8曲であったが、「ラオス古典音楽」のレパートリー全体の数とサンプルの位置付けが示されたなら、本研究の意義がさらに強く伝わったであろう。

以上のような批判点はあるものの、先行研究の少ないラオス音楽を丹念に追い、実際に現地の伝承法でラオス古典音楽を修得した経験をもとにし、さらに曲構造をも分析した困難さを鑑みれば、本研究が優れた研究であることは言うまでもない。ラオス古典音楽の口頭伝承に関して、さらに考察を深めた成果が今後も出てくることを期待したい。

(井上さゆり 記)

◆◆◆ 研究発表申し込みについて ◆◆◆

西日本支部定例研究会の研究発表申し込みは、下記までご連絡ください。

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1 国立民族学博物館 福岡研究室気付  
電話(06) 6878-8351 ファクシミリ (06) 6878-7503  
E-mail: fukuoka@idc.minpaku.ac.jp

◇◆◇ 入会申し込み・住所変更について ◇◆◇

入会ご希望の方は、80 円切手を同封し、下記の学会本部事務局へ入会案内・申し込み用紙を  
ご請求ください。入会申し込み用紙は、ホームページからもダウンロードできます。  
会員の住所変更等についても本部事務局へお知らせください。

社団法人 東洋音楽学会

事務所 〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル 307 号室  
電話 (03)3832-5152 ファクシミリ (03) 3832-5152  
学会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/tog/>  
E-mail: LEN03210@nifty.com

---

支部だより 第 6 5 号

発行：(社) 東洋音楽学会西日本支部 編集担当：奥中康人、谷正人  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1 国立民族学博物館 福岡研究室気付  
電話(06) 6878-8351 ファクシミリ (06) 6878-7503  
E-mail: fukuoka@idc.minpaku.ac.jp